

公民館で女性や若者の生きづらさと向きあう

「講座」「困難を生きる力に変えるヒント」の事例から

鈴木麻里 公民館専門員

はじめに

私は、現在、都内にある公民館で、週四日勤務の公民館専門員（嘱託職員）として働いている。学生時代のアルバイトも含めると、公民館は七つ目の職場になる。工業デザイン専門職（正社員）として職業人生をスタートしたが、一〇年目に出産のため退職。子育て中に保育付き講座に参加したことがきっかけで、男女平等推進施設（男女共同参画センターなどの名称の施設、以下センター）に採用され、非常勤職員として一〇年勤務した。

当時、社会教育の資格も専門性も持っていなかった私は、他市・区のセンターの主催講座や、女性を支援するNPOの講座など、様々な講座に参加した。そこで「女性である」という当事者としての思いを持ち寄り、講座をつくっている女性たちから多くを学んだ。

五〇歳のとき、平成二四年度お茶の水女子大

学社会教育主事講習（以下、主事講習）を受講した。三六人の受講生とともに一〇カ月間学びあい、社会教育主事任用資格を取得した。その記念に公民館の採用試験を受け、今の職場に採用された。公民館専門員となった現在も、東京学芸大学公開講座／東京都公民館連絡協議会連携研修「学びあいを支える実践力を培うーコミュニティ学習支援コーディネーター養成講座」に参加するなど、「学びを提供する側」と「学ぶ側（参加者）」の両方を行き来している。

正社員時代は様々な研修やOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）などスキルアップの機会に恵まれたが、出産後、非正規雇用の仕事に就いてからの研修は、ほとんどが自前となった。金銭的にも時間的にも家族に負担をかけたが、それは無駄ではなかったと思う。

「学びを提供する側」と「学ぶ側」を行き来するうちに、私の中に「メビウスの輪」（図1）のような回路が芽生えた。ハムスターのようにせわしなく「輪」を駆けまわっていると、

「学びを提供する側／学ぶ側」の区切りがなくなり、ひとつながりとなる。

主事講習ではこのようなサイクルを「実践と省察の往還」と呼んでいた。この経験から、私の「学習観」が以下のように形成されていった。

- ① 「学びたい」という発端に、当事者としての思いがあること
- ② 「教える／教えられる」という一方向の学びではなく、学ぶ側（参加者）から学ぶこともあること（学び⇄学びあい）
- ③ 学ぶ側（参加者）がいずれ学びを提供する側となること
- ④ 学びを提供する側にも、学び続ける場があること

この学習観が形成されるにつれ「高名な講師を予算内で呼んでたくさん人を集めること」から、「地域に継続的に学びあう場をつくりだすこと」が私の目標となった。そして「座学中心」から「互いに思いや考えを語りあう」という学習スタイルに重きを置くようになり、それが「ナラティブ・アプローチ」という、臨

床や福祉など対人支

図1



メビウスの輪

援の現場で注目されているものと重なるのではないかと思うようになった。

「ナラティヴ・アプローチ」とは、「互いのナラティヴ（語り）を大切に聴き、受け止めあい、新しい物語を共同で作っていくこと」で、当事者どうし「ナラティヴ」を語りあいながらそれをセオリー（理論）にしていくのが「当事者研究」であるという。「当事者としての思いを持ち寄り、講座をつくっている女性たち」から学んだことも「ナラティヴ」という名前はついていなかったが、実質的にとても近いものだと思う。

公民館で「学びあう場をつくる」ために、今まで暗中模索してきた経験と、そこから得た気づきについて、担当した講座の事例から述べてみたい。

公民館で何を学ぶ？

公民館とは、社会教育法にもとづき「住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与すること」を目的に、各市町村が設置する教育施設である。最近「公民館を知らない」という若者の声を耳にするが、都内で「公民館」という施設区分の施設を設置しているのは一八市二町一村にとどまる。二三区内には「公民館」ではなく「社会教育会館」（二〇区）や、「生涯学習センター」（六区）が設置されている。それ以外に

生涯学習施設の施設区分として、「女性／男女平等推進施設」（二〇区七市）などがある（「東京都生涯学習情報」WEBサイトを参照）。

近年、非正規雇用の増加、女性や子どもの貧困、不登校やひきこもりなど、若者の生きづらさが社会問題になり、公民館でもこうした課題をテーマとする講座が増えている。公民館の講座がきっかけで、「子ども食堂」や「中高生を対象とする学習支援」など、市民や大学生のボランティアな活動が地域に広がっていることも見聞きしている。

私も、公民館に配属されてからの四年間に、「はたらくことから社会を見つめ直す」若者を追い詰める就活や働き方、このままでいいの？（二〇一三年）、「困難を生きる力に変えるヒント」（二〇一四・二〇一五年）、「困難を抱える若者を支えるための『場』をつくろう」（二〇一六年）と題した講座を担当し、非正規雇用の増加、女性や子どもの貧困、不登校やひきこもりなど、若者の生きづらさと向きあってきた。

福祉や医療の現場ではない公民館でこのような講座を実施するにあたっては、「他人事ではない」という思いが原動力となった。

先日、自分の実践を発表しあう機会があり、「弱者にフォークラスした講座は素晴らしいが、弱者だからといって甘やかしてはならない」という意見をいただいた。その場で私は「弱者だから支援しなければ、と思ったことはない」と

反論し、「困難があってもそれに立ち向かっていく姿から学びたい、エンパワーメントしあえる関係を築きたい、そのために講座を続けているのだ」と自分の思いを伝えた。

女性支援の現場では、セクハラやパワハラ、DV（ドメスティック・バイオレンス）などの「当事者」が、ワークシヨップや語りあいをとおして力を取り戻し、「サバイバー」となり、やがて「支援者」として立ち上がっていく姿を目の当たりにしてきた。当事者の力を信じて支えあう女性たちから学んできたことを、今度は私が地域に還元していきたいと思った。

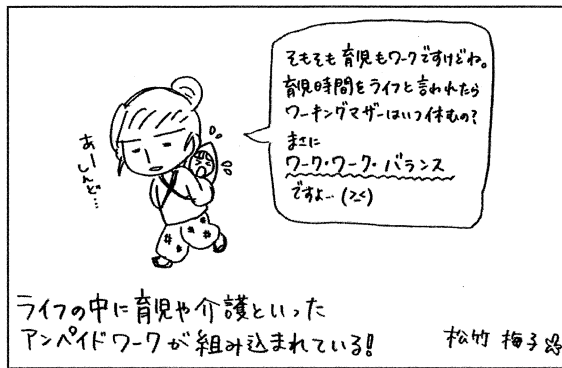
私自身の生きづらさ

前述のとおり、私は工業デザインの専門職として職業人生をスタートした。当時はバブルがはじける前の好景気で会社の株価は跳ね上がり、長時間労働は慢性化し、女性の深夜残業もめずらしくなかった。

出産という壁で仕事を手放した時のことを話すと、今でも「千代の富士の引退会見」のように言葉が詰まってしまふ。私は「母親」になるために仕事も収入もキャリアも手放したのに、なにひとつ手放さずに「父親」になった夫に怒りをぶつけることもたびたびあった。

センターの非常勤の職を得たときは、非正規雇用でも職があることがありがたかった。しかし仕事と家事のダブルシフト、雇止め不安や

図2



作：松竹梅子（認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク主催 WANシンポジウム2016「人間らしく働きたい！ー私たちのディーセント・ワーク宣言」資料より抜粋）

仕事を続けていくための力量形成への焦りなど、いわゆるM字カーブの後半の上昇曲線は、子ども二人を乗せた自転車で坂道を登るがごとく、しんどかった。

経済的な困難も経験した。以前働いていた職場で、週四日勤務から週三日勤務に変更されたのだ。そのときは社会保険を外され、夫の扶養にも入れず、国民健康保険、国民年金、介護保険の保険料が支払い切れなかった。私に仕事がある間は、対等に、別々の財布でやってきた関係が、このことによって崩れ、いつの間に夫に頼らざるをえない自分になってしまったのだらうと、愕然とした。

女性の貧困から若年層の貧困へ

長時間労働を減らすために「ワーク・ライフ・バランス」が盛んに語られるようになった。しかし、松竹梅子さんのイラスト(図2)が物語るように、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉には、「ライフ」の中に育児や介護といったアンパイドワーク(無償労働)が組み込まれている」という落とし穴が潜んでいる。

「女は男に養われる存在だから、低賃金でいい」「育児や介護は女性がタダで担ってきたのだから、低賃金でいい」「家事・育児・介護を担う女性をフルタイムでは働かせられないから、非正規雇用でいい」という世の中の風潮が、男女の所得格差の固定化をもたらした。

景気の低迷により非正規雇用による低賃金が若年層の男性に広がり、それがインパクトを持って報じられると、女性たちは「女はずっとピンボードだった」と、「女性の貧困」が見えなくされることを危惧した。

かつて、成人後の女性が就職せず家に居ても「家事手伝い」という肩書があった。今は、「就労していない」「結婚していない」女性たちは、「自己責任」という世の中の風潮に傷つき、自分自身を責めている。

若年無業独身女性の生きづらさ

女性を支援するNPOのファシリテーター養成講座を修了したことがきっかけで、若年無業独身の女性たちの声を聴く機会があった。「新卒から非正規雇用の仕事しかなかった」「なぜ正社員になれないの、なぜ結婚できないのと親に責められ辛い」「ブラック企業まがいの苛酷な職場で心が折れた」など、私が正社員として働いたバブル期から一〇年ほどで、世の中がすっかり変わってしまったことを知った。

私自身しんどさを抱えていたが、彼女たちの生きづらさはそれとは異なるものだった。私の生きづらさは社会や夫へ向かう「怒り」として、エネルギーに転換することができた。しかし、彼女たちが発していたのは、理不尽な社会に対する不信や失望が入り混じった、自分を責める言葉だった。自分に向かってくる「怒り」に、彼女たち自身深く傷つけられていた。

そして、右肩上がりの時代を生きた親世代が、「努力不足」「怠けている」という、間違った励ましの言葉をやめなければ、彼女たちの自己肯定感は下げ止まらないと感じた。

「はたらくことから社会を見つめ直す」

世代間のギャップが若者の生きづらさの根底

にあることを知ってほしいと、親世代を対象に、「はたらくことから社会を見つめ直す」若者を追い詰める「就活」や働き方、このままでいいの？」と題した講座（全四回）を実施した。

「ブラック企業」が流行語にもなったこの年、伊藤みどりさん（働く女性の全国センター代表）、竹信三恵子さん（和光大学教授）を講師に招き、「ブラック企業にご用心」（土屋トカチ／二〇一三年／三五分）の上映とトークを組み込み、毎回じっくり話しあう時間も確保した。

講座の中で参加者から「雇用の非正規化による企業のコスト削減が、そのまま生活保護など、自治体のコストの増加となっていることがよくわかった」と声が上がった。「個人の努力不足が問題」ではなく「社会の構造やしきみに問題がある」のだと、参加者の間に共感が広がった。

アンケートから「親にパラサイトを許していることで、逆に自立する力を奪ってしまっているのではないか」と、親世代も迷い、悩んでいることがうかがえた。

女性の貧困や若者の不安定雇用の先に「子どもの貧困」「教育格差」「ひきこもり」の問題も見えてきた。翌年の講座でそれらを取り上げようと考えた。

「困難を生きる力に変えるヒント」（二年目）

二〇一四年一月、「女性の貧困特集」がテレビで放映され、巨大メディアの高みの見物か、という番組批判がネットを騒がせた。私も放送を見ていて、「かわいそうだから何とかしなければ」と「上から目線」で支援されたのではたまらないと感じた。

そこで企画中の講座は、専門家が解決を指南するような講座ではなく、支援する人とされる人が互いに学びあう場にしたと考え、「困難を生きる力に変えるヒント」という講座名が浮かんだ。「当事者としての思いが活動の発端にある方」として、赤石千衣子さん（NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事長）、仁藤夢乃さん（『難民高校生』著者、一般社団法人Colabo（コラボ）代表）に講師をお願いし、グループでの話しあいプログラムに組み込んだ。講座アンケートに「自分がより良くなるための気づき」と「社会がより良くなるための気づき」を記入する欄を加え、それをまとめて毎回の講座で通信として発行し、参加者が交流するツールとなるようにした。

公民館だよりと市のホームページという従来の広報では、この講座を必要としている人に情報を届けることが難しいと思われた。そこで、地域の様々な集まりに顔を出してはチラシを手

渡し、テーマに関心がありそうな個人や団体には郵送もした。自治会の掲示板を初めて利用し、民生委員さんの総会でチラシを配付させてもらった。日ごろ公民館を利用していない一〇代の若者にも参加してもらいたいと、近隣の都立高校の進路指導の先生にチラシの配付をお願いした。

映像の力も借りた。「人生は必ずやり直せる！『トークバック 沈黙を破る女たち』（坂上香／二〇一三年／日本／日本語字幕／一九分）上映とトーク」をブレイベントとして実施したところ、五〇人を超える申し込みがあり、それに続く講座にも多くの申込みがあった。

生きづらさの根底にある「関係性の貧困」

講師のひとり仁藤夢乃さんは、学校にも家庭にも居場所がなく、渋谷をさまようギャルだった。信頼できる大人との出会いをきっかけにサポート校で学び直し、AO受験で大学へ進学。現在は女子高生など少女の自立をサポートする団体を主宰し、『JK産業』と呼ばれる性風俗にからめ捕られる女子高生に寄り添い、声かけや相談にあたっている。

寂しさにつけ込んでくる裏社会のやり方を逆手にとり、善意の「スカウト」「店長」「オーナー」という役割を市民が担う、という仁藤さんの斬新な提案が参加者を引きつけた。貧困、教育格差、非行やひきこもりなどの問題は、孤立や無関心という「関係性の貧困」と根っこでつ

ながっている、と気づくこともできた。

地元の支援者と当事者、両方の声を聴く

公民館がある地元には、無料の学習支援を行なっている市民のグループがいくつかあり、経済的な理由から塾に行かない小中学生や外国にルーツをもつ子どもを支援している。そのスタッフを講師に招き活動を紹介していただいた。八年前から市内で子ども・若者の学習支援と居場所づくりを行なっている認定NPO法人文化学習協同ネットワークの職員高橋薫さんと、そこで学び現在は年下の世代の世話をしている青年を講師に招いた。その青年が自分たちの活動を紹介する映像を徹夜で製作してくれて、それを上映した。困難を抱えていた若者が支援者として立ち上がっていく姿が、とても頼もしかった。

参加者が当事者として語り出す

最終回に近づくにつれ、自分や家族のことを話す参加者が増えた。同じ悩みがあるとか、と話が尽きることなく、参加者同士で経験や情報を交換する姿が見られた。アンケートから、家族がひきこもっている参加者がいたこともわかった。「社会に入れない子どもの問題を抱えているが、プレイベントの映画のように自分を語ることで変わっていききたい」という声に背中を押され、翌年の講座は「ひきこもり・ニート」に焦点を当てようとした。

「困難を生きる力に変えるヒント」 (二年目)

「自己責任論」はどこから来たか

一九七〇年代「一億総中流」といわれた日本が、なぜ二〇一四年には「六人にひとりの子どもが貧困状態にある」社会になってしまったのか。「遠くの親せきより近くの他人」といわれていたのに、いつの間に「勝ち組」「負け組」に分断され「負け組」怠けている」と「自己責任を強いる社会」になってしまったのか……。講座二年目は、この質問を講師に投げかけることから始めた。

応える講師は中山智香子さん（東京外語大学大学院教授）。福祉や教育の分野にも蔓延している「自己責任論」がどこから来たのか、経済の視点から、次のように解説いただいた。

「新自由主義（特に金融市場の拡大を基盤に置くグローバルな自由主義）」において、自由な経済活動の結果、「儲かるか損するかは自己責任」であるのが大前提。「（利益に）役立つ人間にだけ価値がある」という、「新自由主義特有の人間のマネジメント」を突き詰めると、「人がモノのように」扱われていく。「働き方」の変遷を時間軸で見えていくと、それはどんどん劣化していることがわかる。「人間は役に立つから価値がある（役に立たない人間には価値

はない）」という価値観が蔓延した結果、「負け組」といわれた人々はさらに自分より「負けている」人、さげすむ対象を求め続ける。ヘイトスピーチなど劣化した人間性もそこから生み出されている。

また、「経済成長率より、資本が資本を生む資本の収益率の方が高い」ことを、過去三〇〇年程のデータから示したピケティ『二一世紀の資本』を読み解くことで、「格差が拡大しても、辛抱していれば、経済成長がやがて万人に利益をもたらす」という仮説のほころびに気づくこともできた。

「人間＝資本ではない」という講師の力強い語りから、「自己責任論」に流されず、「誰もが生きやすい社会」「つまずいてもやり直せる社会」をめざそうと、講座の方向性が定まった。

講座の全体像を参加者と共有する

今回の講座も、いじめや不登校、大学中退などの経験を持ち、現在は支援者として活動している人に講師をお願いした。

「孤立や無縁化が進み分断されてしまった『地域』と『家族』と『教育』をもう一度結び直し、つながりを再生したい」という講座の意図を可視化するための図（図3「講座のキーワード」）も作成した。

毎回の講座のオープニングトークで、前述の「社会保険料が払えなかった」といった「自分ネタ」も話し、「鈴木さんも当事者だったんで

図3 講座のキーワード

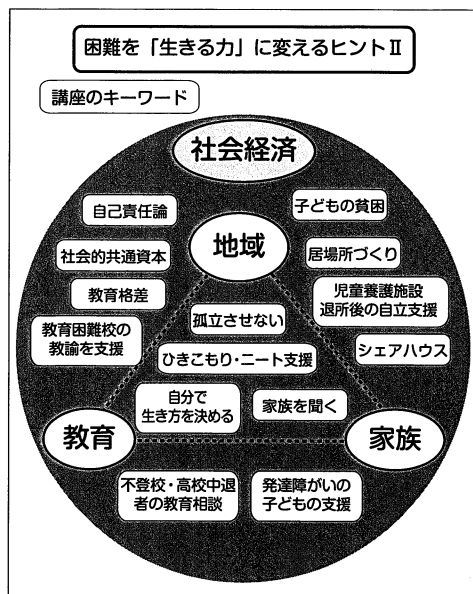


図4 映画チラシ

すね」とアンケートに感想をいただいた。それが呼び水となったのか、ご自身の当事者としての経験を話される講師は少なくなかった。たったひとりでも、向きあってくれる大人がいれば子どもは救われる

講師のひとり、松田悠介さん (Teach for Japan CEO) は、「いじめる側の子どもを制裁しても何の解決にもならない。子どもはたったひとりでも、向きあってくれる大人が、がいるだけで救われる。誰かひとりでも自分を信じてくれる人がいてくれるれば、人は変わる」と体験を語ってくれた。

身体が小さかったことから標的にされたとき、「どうすれば、いじめられなくなるんだろうね」

とより添ってくれた体育の先生の存在に助けられた。その先生は答えを与えるのではなく、自ら解決策を見つけてくれることができるよう、対話を続けてくれたという。松田さんは、子どもなりに身体を大きくするための情報を集め、日々それを実行し、三年間で三〇センチ背が伸びたというエピソードとともに、当事者としての子どもの目線から、ヒントを話してくれた。

「支援する／支援される」関係の難しさ

プログラムに二本、上映会を組み込んだ(図4)。

○「サムライ」(森谷雄／二〇一五年／一八分) 長野県上田市のNPO法人「待学園ス

クオーラ・今人」を設立した長岡秀貴さんの実話を、三浦貴大さん主演で映像化。

○「ナイアガラ」(早川千絵／二〇一四年／二七分) 児童養護施設を退所した一八歳の女性と祖母、その介護者との日常を描いた作品。上映後、児童養護施設退所後の自立を支援している高橋亜美さん(アフターケア相談所「ゆずり」は「所長」と早川監督が対談。

「サムライ」ではネグレクトと思われる家庭が描かれ、アキという小学生と弟が母親の帰りを待っている。「子どもの支援者が家に出入りする度に、自分はダメな母親だと言われている気がした」とアキの母親はうなだれ、主人公長岡との約束を守れず叱責されると、「見下し

やがって」と長岡に怒りをぶつける。良かれと思つて支援していても、逆に人を傷つけてしまうことがあるのだと、支援することの難しさが描かれていた。

「ナイアガラ」には、死刑囚の祖父、認知症の祖母宅に住み着いている介護士が登場し、どんな人も色眼鏡で見ることなく描く監督のまなざしが静かな感動をよんだ。

「ナイアガラ」上映後の対談で、高橋亜美さんから「自分のものさしで人を評価しない視線が作品を貫いていた」と、感想が語られた。高橋さんは、支援者と被支援者の間には力関係が生じてしまうことを、日ごろから意識して相談にあたっているからこそ、「相手を評価（査定）しない視線」に着目されたのだろう。

若者の自立のコストを誰が負担するか

講師のひとり、久保田裕之さん（日本大学文理学部准教授・家族社会学）は「自身もシェアハウスに住む若手の社会学者」。

「ひきこもり」がないというデンマークでは、子どもは一八歳になると親元を離れ、学費・学食は無料で自立のために国からお金も支給され、月々四万円ぐらいアルバイトで稼げば、充分暮らしていけるという。

子どもの自立にはお金がかかる。金銭的な余裕がないために現状に留まるしかないという、ひきこもり問題の別の側面も見えてきた。また、「奨学金」という多額の借金を負わせられる日

本の学生の問題にもつながっていると感じた。

シェアハウスは「家計責任」「家事責任」の両方が果たせないと破たんするが、「日本の子どもは世界一家事をしない」という講師の言葉にハッとされた。ひきこもり・ニートのゴールを考えるうえで、就学・就労支援、その先の「家計責任（納税者になること）」に気を取られ、「家事責任（育児・介護）」についてあまり考えてこなかったことに気づかされた。

閉塞した核家族のなかで問題を行き詰らせてしまうのではなく、コミュニティに開いていくことで解決しようというシェアハウスの事例からヒントを得ることができた。最近、社会問題になっている「空き家問題」解決の手がかりにもなりそうだ。

地元で一二年続くひきこもり支援の団体

講師のひとり、鈴木剛さんは対人関係に自信が持てない人のための勉強会「オンリーワンクル（ワンクル）」を一二年間、地元で開催している。参加人数が伸び悩み、もう止めてしまおうかと悩んだとき、「参加者ゼロ人でも、場が開かれていることが大事なんじゃないの」と、妻に励まされた。家庭と職場以外に、第三の場があることが支えになる、と語る鈴木さんご自身も「ワンクル」という居場所に助けられてきたという。

数年前に「ワンクル」をネットで知り、毎月の会合やイベントに参加することで自信を取り

戻し、少しずつ働けるようになったという青年をゲストに招き、ひきこもり体験をお話いただいた。彼は、人前で話すことは自分の回復にも良い影響があると感じていて、同じような悩みを抱えている当事者や家族の力になりたいとも話してくれた。

繰り返し語られること

講座中盤、一人ひとりに「繰り返し語られる物語がある」と気づいた。「子どもも辛いだろうが自分もしんどい」「家族の中で自分の本音があると言えなかった」「お金に縛られない生き方もある」と知り気が楽になった」など、この場では何を話しても決して非難されたり説教されたりしないとわかると、「今まで人に話したことがない」という話をされる人も出てきた。

家族や同僚に何かを相談すると、「私が抱えている問題」が「私という個人が問題」にすり替わってしまうことがある。しかしそれほど親しくなく利害関係もない、第三の場では「私という個人」より「私が抱えている問題」に光が当たりやすく、「私」と「問題」が切り分けられることで、「私」が批判され傷つくリスクが抑えられるのではないか。この講座もまた「第三の場」であり、ほどよい距離感から、「話しても大丈夫」という安心感が得られたのではないかと思う。

近年、発達障がいや依存症のセルフヘルプ・グループなどの臨床領域で「ナラティブ（語

り」が注目されているという。この講座も「ナラティブ」のひとつなのではないか。グループで語りあい、アンケートに書き、通信で読む、ということを繰り返すたびに、一人ひとりが引つかかっている、あるいは、一番大切にしている物語が姿を現してきた。

互いの力を引き出すメンバーの多様性

講座全一回の終了後、学び続けたいという有志が集まり、サークル結成に向けた話し合いが始まった。メンバーは「困難を抱える家族がいる人」「お金に縛られない生き方を模索している人」「誰かの役立ちたいと考えている人」と、年齢も課題や関心も三者三様。

講座で自らの不登校体験を話され、メンバーからの信頼も厚い社会福祉協議会の職員も、「都合がつけいたらミーティングに顔を出させていただくね」と自ら巻き込まれてくれた。

当事者だけのグループは、同じ悩みを持つものどうしわかりあえるというメリットがある反面、それぞれが抱える「困難の大きさ比べ」になりがちだとも聞く。それに対して、公民館という「誰でも学べる場所」に集う仲間には三者三様。この多様性がグループの力を引き出すカギになるかもしれないし、空中分解してしまうかもしれない。メンバーがより深く知りあうにつれ、「支援する側／支援される側」に役割が固定化し、上下関係が生じ、対等な関係が崩れてしまうかもしれない。ハラハラドキドキでミー

ティングを進めた。

サークル名は「バロッコ」(Barocco)」

数回のミーティングを重ね、サークルが結成された。名前の由来は「いびつな真珠」という意味のイタリア語。「殻を閉ざして大切なものを守っている」真珠貝に、困難から身を守るイメージを重ねている。「いびつな真珠」は装飾品として希少価値があるらしいが、「どんな真珠にも価値がある」という多様性を容認する思いと、ひきこもり・ニートのゴールはひとつではないという願いも込められている。

メンバーの思いを次の講座の企画へつなぐ

サークルができて、ひきこもっている若者が公民館へ足を運ぶのは容易なことではない。まずはひきこもる若者を支えている家族や地域の支援者など、「様々な人が集まれる場」を作ろう」と方向性が見えてきた。

「今ひきこもっている子どもがここへ来ることは難しいかもしれないが、いつか連れて来たい」「子どもを理解するために学びたい」「子どもが変わりたい」と思ったとき、選択肢はいろいろあるよと伝えられるように、引出しを増やしたい」「必要なだけ稼ぎ浪費しない生活を追及したい」「日本の同調圧力から抜け出したい」など様々な思いが交錯するなか、次年度の講座の企画をメンバーに委ねてみた。

私が作成した次年度の講座案をたたき台に、

バロッコメンバーが推薦する講師に置き換えていった。推薦者は、講師の紹介とその推薦理由と「自分ネタ」を、毎回の講座のオープニングトークで話すことになった。

「困難を抱える若者を支える場をつくる」(三年目)

講座は「場づくり」歴二六年の長田英史さん(NPO法人れんげ舎代表理事)から、「自分にとって必要な場」は自分で作れるんだよ」と背中を押してもらったことからスタートした。

「学校へ行かないという生き方を貫きつつ、生きる術を切り開いている」須永祐慈さん(NPO法人ストップいじめ！ ナビ副理事・事務局長)、「子どもの不登校をきっかけに親の会で学び始め、今はコミュニケーション講座の講師やスクールソーシャルワーカーとして支援に関わっている」小山裕子さん(NPO法人オニバスの種副理事長)に、当事者から支援者へと立ち上がっていった経験を話してもらった。

初めて「ナラティブと当事者研究」を講座のプログラムに加えた。講座で出会ってから二年間、学びあってきたバロッコメンバーの内面的変化はひしひしと感じていたものの、それがどうして起こったのか、担当者として知っていた。女性を支援するNPOでファシリテーションを学んでいたときも、二時間のワークショップで女性どうし思いのたけを語りあうなかで、

図5 マインド・マッピング

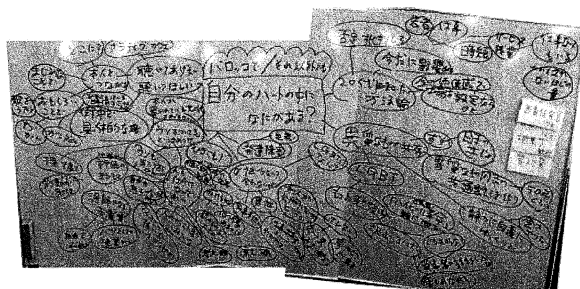


図6 カフェバロックチラシ

無料
フレイアワン

カフェバロック

最近の出来事や、日ごろ感じていることなどを、
お茶を飲みながら、おしゃべりして、
ホッとひと息つきませんか。
お茶、お菓子、ゲーム、ギターの生演奏、
「0円均一」などもご用意しています。

日時: 10月16日(日) 午後1時~3時

場所: XXXXXXXXXX

問合せ: XXXXXXXXXX

どなたでもご参加
いただけます。

「カフェバロック」は、市民館主催講座「困難を生きる力に資するイベント」からできたサークル「バロックメンバー」と、講座「困難を抱える者を支える場をつくらう」参加者有志が企画・実施しています。「バロック」とはイタリア語で「いびつな真珠」という意味。大切なものを守るために殻を閉ざす真珠貝と、困難から身を守るイメージを重ねています。

笑顔をとり戻し、気持ちを上向きになる姿をたくさん見てきた。体験的に知っていることを、頭でもわかりたいと、私が野口裕二さん（東京学芸大学教授）を推薦した。

この回の参加者は、当事者と当事者ご家族が三割程を占めた。「当事者」「当事者ご家族」「地域の人たち」という三つのグループに分かれ、「批判モードでもなく、反省モードでもなく、研究モードで語りあう」というグループワークを行なった。「ひきこもりは悪いことなのか」「こうあらねばという価値観が親にも子にも内在化している」など、参加者の声が互いの

気づきを深め、参加者アンケートにこのようなメッセージをいただいた。

「『こうあらねば』という自分自身の既成概念を乗り越えてくことは、思っている以上に大変だ、とあらためて感じた。ひとりではできない。だからこそ、場と、安心して語りあえる仲間が必要なのだ。」

参加者から学ぶというのはこのことだ。私が一五年間、様々な講座をうろうろして、体験的に知ってはいてもうまく説明できないでいたことが、ひとりで表わされている。「参加者の力を信じる」ということも実感できた瞬間だった。

自分のハートの中になにがある？

バロックメンバーも、講座やその後のミーティングで、繰り返し自分の物語を語るなかで、聴き手の力を借りて自分の物語を転換していったのだ。

その痕跡が消えてしまうのはもったいないと、毎回行なわれる質疑応答を書き起こし、通信の付録として発行し参加者に配付した。

ミーティングを重ねるなか、「私たちはいたいいつまで学び続けるんですか」というバロックメンバーの一言が、活動を一歩前進させた。具体的にそれぞれ「何がやりたいのか」出しあうため、メンバーのひとりがファシリテーターを務め、「自分のハートの中になにがある？」をテーマに「マインド・マッピング」を行なうことになった（図5）。「無責任発言OK」「批判NG」「相乗り歓迎」「質より量」というルールで、みんなの意見をひとりがどんどん白板に書き連ねていく。

このワークショップは私も初めて。参加者のひとりとして、日ごろモヤモヤと考えていたことを吐き出すことができた。

そして「バロック」初の事業は、誰でも気軽に立ち寄ることができるカフェに決まった。

カフェバロッコブレオープン

カフェのポスター作成にあたっては、「バロッコカフェ」なのか「カフェバロッコ」なのかリード文は「マインド・マッピング」で抽出した文言と齟齬がないか活発にメールのやり取りが続いた(図6)。

ブレオープンなので参加費は無料とし、お茶やお菓子はそれぞれが持ち寄ることになった。メンバーどうし何を持ち寄るか、BGMにギターの生演奏を頼もう、メンバーのひとりが運営に関わっている「ゼロ円均一」の商品も並べようと、私がんばりしている間に、次々に決まっていた。

広報の期間はあまりなかったが、担当している公民館主催事業上映とトーク「さなぎ」学校に行きたくない」(監督・撮影・編集・三浦淳子/二〇一二年/日本/一〇三分/ドキュメンタリー)のテーマと重なることから、上映会場でチラシを配付し、バロッコメンバーも上映とトークに参加しカフェを宣伝することができた。

どのぐらい集客があるかまったく予測できなかったが、六人がカフェを訪れてくれた。当事者経験のある人、地域でボランティアなど支援をしている人、通りすがりの人……、反省点はたくさんあるが、一歩踏み出すことができた。

おわりに

「女性の生きづらさ」をなんとかしたいという思いでスタートした「困難を生きる力に変えるヒント」と題したシリーズの講座だが、講座に参加した人たちと学びあい、そこから得た気づきを元に次年度の講座を企画するということを、三回続けてきたところ、講座の企画のきっかけとなった若年無業独身女性の姿がこの講座から見えなくなってしまった。「しよせん、公民館は公民館に来られる人だけの学びの場なのだろうか」「どうしても公民館に来られない人と、どうやったらつながれるのだろうか」という、古くて新しい課題が見えてきて、振り出しに戻ったように感じている。

次年度は、「家事手伝い」や「家族介護」を担うなかで、生きづらさや困難を抱えている女性たちに参加してもらえるような講座を実施したいと考えている。

【参考資料】

- * 「東京都生涯学習情報」WEBサイト <http://www.syougaimetro.tokyo.jp/index.html>
- * 竹信三恵子『家事労働ハラスメント——生きづらさの根にあるもの』(岩波新書、二〇一三年)。
- * 仁藤夢乃『難民高校生——絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』(英治出版、二〇一三年)。
- * 「NHKの「女性の貧困特集」ドキュメンタリー

番組に疑問符……結局は国営巨大メディアの「高みの見物」か」日刊サイゾー二〇一四年二月一二時〇〇分配信(文・橋本玉泉)。

* 野口裕二『物語としてのケア ナラティヴ・アブローチの世界へ』(医学書院、二〇一五年)。

(すずき まり)